

留学生別科の留学生と日本人学生の オンライン交流会の実施報告と一考察

—アンケート調査の結果から—

古島友也

【キーワード】 コミュニティ、ソーシャル・ネットワーク、留学生、オンライン交流

1. はじめに

日本にやってくる多くの留学生は、来日後に周りの日本人学生や留学生と接触することで所属するコミュニティを模索し、形成していく。神田外語大学(以下、KUIS)では、留学生と日本人学生は好きな時間に直接会ってコミュニケーションを行うラウンジを学内に設置している。しかし、2020年4月度から日本における留学生生活を始めた留学生はCovid-19の影響により、日本人学生や留学生と学内で直接交流する機会がなく、周りの学生と交流する機会はオンライン授業を通して得られるものがほとんどであった。一般的にオンライン授業では自由に会話する場面がなく、彼らのコミュニティ形成は困難であることが予想されたため、コミュニティ形成の一助となるよう、自由に会話するための場を提供するためオンライン交流会を企画、実施した。

今後もしばらくの間、Covid-19の影響は続くと考えられ、オンライン上での交流がより盛んになると予想される。オンライン交流会についての学生のアンケート回答の考察を通し、今後のオンライン交流会の開催に向けた示唆、さらには大学に直接行くことができない留学生のコミュニティ形成の一助となる示唆を提示したい。

また、本稿ではオンライン交流会に参加した留学生は留学生別科に所属する留学生である。そのため、留学生別科に所属する留学生をこれ以降、「別科生」と記述する。

2. コミュニティの形成とコミュニティへの所属について

留学におけるコミュニティの形成や所属、友人との関係を構築していくことを田中(2000)に倣い、本稿ではソーシャル・ネットワークと呼ぶ。

山川(2012)は、留学生がソーシャル・ネットワークを形成しやすい場として、寮やクラブ活動を挙げている。また、大学内でのソーシャル・ネットワークの形成が難しい場合には、大学の外でコミュニティに参加、あるいは形成しなければならないとしている。そのようにコミュニティに所属し、ソーシャル・ネットワークを形成していく過程を「自分の居場所探し」としている。「自分の居場所探し」の過程ではコミュニティに参加し、同じ時間に、同じ場所で行動を共にし、時間・空間を共有し、受け入れられることで、そのコミュニティへの所属感が湧き、自分をその一部と捉えるようになり、自分の居場所であると

認識するようになる。反対に、参加したコミュニティの中で時間・空間の共有が十分にされない場合には、親密な関係を築くことができず、他のコミュニティを探し、人間関係を深めようとする。そのようにソーシャル・ネットワーク形成しながら自分の居場所を構築していくことで充実した留学生活に繋がっていくとされている。

本稿では、直接交流しソーシャル・ネットワークを形成することが難しい別科生や日本人学生とのソーシャル・ネットワークを築く場としてのオンライン交流会について触れていく。

3. オンライン交流会開催に向けて

オンライン交流会を行うにあたって、実際に別科生がオンライン上での交流会を希望しているか、また、どのような内容の交流会を期待するかについて調査するため、別科生に向けて、ニーズ調査を行った。ニーズ調査は Google Form を用いたアンケート形式をとった。アンケートはオンライン上で行うこととし、別科生にメールで配信した。アンケートは匿名で行われた。ニーズ調査は 2020 年 6 月 1 日から 2020 年 6 月 7 日までの 1 週間を回答期間とした。その結果、留学生 28 名から回答を得ることができた。なお、このアンケートは日本語と英語の 2 言語併記で行われた。

3-1 ニーズ調査の結果

留学生 28 名から得られた回答結果は以下の通りである。

ニーズ調査・質問 1

オンラインで日本人と交流する機会があったら参加しますか。

表 1 ニーズ調査・質問 1 回答

	別科生 (28 名)
はい	21 名 (75.0%) ⁽¹⁾
いいえ	7 名 (25.0%)

質問 1 は別科生が日本人学生とのオンラインでの交流を希望しているかどうかのニーズを知るために行った。結果は上記の表 1 の通り、全ての別科生が日本人学生との交流を希望しているわけではなかった。日本人学生との交流を希望しない別科生には次の質問でその理由を述べてもらった。

ニーズ調査・質問 2

「いいえ」を選んだ人に質問です。参加しない理由はなんですか。(複数選択可・記述式回答有り)

表2 ニーズ調査・質問2回答

	別科生(7名)
興味がないから	2名(28.5%)
交流したいが、オンラインではしたくない	5名(71.4%)
日本人と交流する機会が他にもある	4名(57.1%)
時間がない(記述回答)	1名(14.2%)

もっとも多い回答には「交流したいが、オンラインではしたくない」というものがあった。ニーズ調査を行ったのは6月1日であり、オンライン授業が始まった4月27日からおよそ1ヶ月がたった頃であるが、すでにオンラインを介した交流に疲れがあった可能性がある。次に多い回答に「日本人と交流する機会が他にもある」であった。この回答をした別科生はすでに日本人と交流することができるソーシャル・ネットワークを形成していたと考えられる。「興味がないから」と回答した別科生の理由は本ニーズ調査からは言及できないが、日本人学生と交流すること自体に興味がない、あるいは交流会という企画に興味を持たないなどの理由が推察できる。

記述式回答では「時間がありません」と答えた別科生が1名いた。慣れないオンライン授業で時間がなかったのか、あるいはアルバイトを続けることができている別科生の場合にはアルバイトで多忙だった可能性も考えられる。

ニーズ調査・質問3

どのようなテーマについて話したいですか。(複数選択可、記述回答有り)

表3 ニーズ調査・質問3回答

	別科生(質問2で「いいえ」と答えた7名を除く21名)
好きな本について	8名(38.0%)
好きな料理について	15名(71.4%)
好きなスポーツについて	5名(23.8%)
好きなアニメ・コミックについて	7名(33.3%)
日本語の勉強について	13名(61.9%)
自由会話	20名(95.2%)
趣味・旅行(記述回答)	1名(4.7%)

質問3の狙いは互いに初めて交流する別科生と日本人学生が話題に困ることなく円滑に交流ができるように話しやすいテーマを聞き出すことであった。しかしながら表3の通り、テーマを決めずに会話を行う「自由会話」が95.2%を占めた。次点で「好きな料理について」が71.4%、「日本語の勉強について」が61.9%と続いた。

質問1と質問3の結果、日本人学生との交流を過半数以上の別科生が希望していることから、日本人学生とのオンライン交流会の実施を決めた。テーマについては別科生の大多数が希望していることから定めないことにした。

3-2 オンライン交流会の概要

オンライン交流会は2020年6月24日にオンラインビデオチャットツールである「Zoom」を活用して行った。「Zoom」はKUISのオンライン授業でも活用されているため、別科生と日本人学生にとって馴染みのあるものである。

オンライン交流会は90分間行うことにした。90分の間にそれぞれの参加者が会話に参加できるようにするため3人から4人のグループを事前に作成した。交流会では2回グループを入れ替え、1人あたり計3つのグループで交流できるようにした。また、オンライン交流会の実施が初めてであるため、1回目のグループ、2回目のグループでは以下の表5、表6の属性を参考に、クラスのレベルや国籍・地域の類似している別科生が同じグループに参加できるよう配慮した。3回目のグループ分けはランダムである。ただし、1回目、2回目、3回目のグループの全てにおいて日本人学生数は1名か2名に限定した。なお、1つのグループあたりの交流時間は、入れ替えの時間と休憩の時間を考慮し、20分とした。

3-3 参加者の募集

オンライン交流会への参加者を募るため、メールで別科生と別科生との交流に興味がある学生が登録しているメーリングリスト「多文化交流ネット」に告知とGoogle Formで作成した申込みフォームを配信した。また、メールの他に、各レベルのインターアクションの授業において留学生別科の講師からオンライン交流会の告知をしてもらった。

参加申込みがあった学生のうち、実際に参加した学生の人数と別科生のインターアクションクラスのレベルと国籍・地域を以下の表にまとめる。なお、インターアクションクラスはレベル8に向かうほど能力の高いクラスである。

表4 交流会参加者数

	別科生	日本人学生
参加者数	11名	14名

表5 参加した別科生が所属するクラスのレベル

クラスのレベル	別科生(11名)
レベル3	2名(18.1%)
レベル4	2名(18.1%)
レベル5	2名(18.1%)
レベル6	1名(9.0%)
レベル7	1名(9.0%)
レベル8	3名(27.2%)

表 6 参加した別科生の国籍・地域

国籍・地域	別科生(11名)
インドネシア	3名(27.2%)
中国	3名(27.2%)
台湾	2名(18.1%)
ベトナム	1名(9.0%)
ブラジル	1名(9.0%)
日本	1名(9.0%)

4. オンライン交流会の実施

当日オンライン交流会が始まり、連絡なしに欠席した学生がおり、予め決めていたグループ編成を改めた。それ以降は別科生と日本人学生がそれぞれのグループに分かれ交流を始めることができ、円滑に会話ができていた。

4-1 オンライン交流会後

オンライン交流会後に今後のオンライン交流会の参考にするため、アンケート調査を行った。その結果、参加した別科生11名のうち9名(81.8%)と参加した日本人学生14名のうち11名(78.5%)から回答が得られた。なお、このアンケートは、オンライン交流会後に別科生と日本人学生の親交が続いているか問う質問や、学期を振り返る質問が含まれるため、交流会の開催日2020年6月24日からおよそ1ヶ月後である2020年7月21日に参加者のメールアドレス宛にGoogle Formを配信して行った。

5. 調査結果・考察

本章では、交流会後のアンケート調査の結果と考察を述べる。

5-1 オンライン交流会への参加目的

オンライン交流会の実施にあたっては、事前に参加目的を学生には問わなかった。しかし、今後、オンライン交流会を実施をする場合はさらに学生のニーズにあったオンライン交流会を開催するべきだと考え、別科生、日本人学生のそれぞれに以下の選択式質問をした。選択式質問の選択肢について別科生と日本人学生で問いが異なるものがある。

アンケート調査・質問1

このオンライン交流会への参加目的は何ですか。(複数選択可・記述式回答有り)

表 7 別科生の参加目的

	別科生(9名)
異文化交流	7名(77.8%)
友人作り	7名(77.8%)
日本語学習	5名(55.6%)

表 8 日本人学生の参加目的

	日本人学生(11名)
異文化交流	11名(100.0%)
友人作り	6名(54.5%)
外国語学習	3名(27.3%)
日本語教育に興味がある	5名(45.5%)

別科生、日本人学生の双方から記述した回答は得られなかった。

質問1の回答から得られる留意すべき点として、別科生は「異文化交流」と「友人作り」がともに71.4%であることに對し、日本人学生の回答では「異文化交流」が100.0%だが、「友人作り」は54.5%ということがある。別科生はオンライン交流会を行うことで、交流会後にも継続した交流を求める傾向があることに對し、日本人学生は約半数が交流会においてのみの交流であると考えていることがわかる。交流会が日本で行われたことで日本人学生にとっては新たにソーシャル・ネットワークを形成する必要がなく、反対に別科生はCovid-19の影響から自由に大学に行くことができないことで、コミュニティへの所属が難しくソーシャル・ネットワークを形成することに目的意識を持ったのだろう。このような目的意識の違いは、交流会が終わった後に不満に繋がったり、別科生に至っては友人ができなかったことで不安になったりすることも考えられる。このような目的意識の違いは交流会の告知をする段階で、明確に提示することで最小限に抑えられると考える。別科生と日本人学生が同じ目的を持ち参加することでソーシャル・ネットワークの形成がスムーズに行えるようになるだろう。

一方で、その他の項目を見てみると別科生は55.5%が「日本語学習」を目的としていて、日本人学生は45.5%が「日本語教育に興味がある」ことを目的としている。双方の約半数が目的としていることから、今後行われる交流会では、双方の目的を達成するため、「日本語を教える」や「日本語を習う」などのテーマで交流会を行うことができるだろう。

アンケート調査・質問2

参加目的は達成できましたか。

表 9 アンケート調査・質問2回答

	別科生(9名)	日本人学生(11名)
はい	7名(77.8%)	10名(90.9%)
いいえ	2名(22.2%)	1名(9.1%)

別科生と日本人学生の双方ともに参加目的を達成した学生がほとんどであったが、達成できなかった学生も見受けられる。「いいえ」と答えた学生にはさらに達成できなかった理由を記述してもらった。参加目的と達成できなかった理由は以下の通りである。

表 10 参加目的が未達成の理由

	参加目的	理由(記述式回答・原文まま)
別科生 A	日本語の学習	時間が短くて、オンラインで見知らぬ人と交流するするのも下手なので、予期の効果を達成できません。
別科生 B	友人作り	やはり一回会っただけで友達になるのは難しいね
日本人学生 C	異文化交流、友人作り、外国語学習、日本語教育に興味がある	時間が短かった。留学生 2 人しか話せなかった。

別科生 A は日本語学習を目的に参加したが、効果が得られなかったという。その理由に時間の短さとオンラインで知らない人との交流が苦手であることを挙げている。時間の短さは、グループの入れ替え時間を少なくすることや、交流会の時間を延長することで解決できるが、オンラインでの交流が苦手な点は、参加者本人のオンラインへの適正が影響する。オンライン交流会はどこにいても開催可能であることが利点であるが、誰もがオンラインで思うように交流できるわけでないことは今後のオンライン活動で考慮しなくてはならない点である。

次に別科生 B であるが、交流会で 1 度会うだけでは、友人になることは難しいという。友人になるまでは、時間をかける必要があるがオンライン交流会では時間をかけることができず、友人関係になることは難しかったのだろう。

最後に日本人学生 C については、「時間が短かった」という点に関しては、別科生 A と同意見である。また、「留学生 2 人しか話せなかった」という理由から「異文化交流」や「友人作り」に関して達成できなかったのだと考えたのだろう。しかし、実際のところ、日本人学生 C は交流会では別科生 3 名と交流しており、他の日本人学生も別科生とは 3 名か 4 名のみ交流したのみである。この意見が出た理由として、日本人学生 C が交流した別科生の中に日系の名前を持つ学生がいたことが考えられる。このような別科生と日本人学生の交流会において、日本人学生が別科生を別科生として認識できないということ、反対に別科生が日本人学生を日本人学生と認識できないことは、国際化していく中でさらに起こりうる問題であろう。そのためオンラインで交流する際には、別科生と日本人学生の双方に所属を明記してもらおうなど、工夫が必要だろう。

5-2 オンライン交流会の設定

オンライン交流会に関して、参加人数や時間について意見を募った。

アンケート調査・質問 3

日本人学生と別科生の比率はどうでしたか。

表 11 アンケート調査・質問 3 回答

	別科生(9名)	日本人学生(11名)
別科生・日本人学生どちらもさらに多い方が良い	2名(22.2%)	1名(9.0%)
別科生がさらに多い方が良い	0名(0.0%)	2名(18.1%)
日本人学生がさらに多い方が良い	1名(11.1%)	0名(0.0%)
ちょうど良い	5名(55.5%)	8名(88.8%)
別科生がさらに少ない方が良い	1名(11.1%)	0名(0.0%)
日本人学生がさらに少ない方が良い	0名(0.0%)	0名(0.0%)
別科生・日本人学生どちらもさらに少ない方が良い	0名(0.0%)	0名(0.0%)

別科生、日本人学生ともに「ちょうど良い」が過半数の割合を占めている。その他には、「別科生・日本人学生どちらもさらに多い方が良い」や日本人学生からは「別科生がさらに多い方が良い」、別科生からは「日本人学生がさらに多い方が良い」などの選択肢が選ばれている。別科生からは「別科生がさらに少ない方が良い」という選択肢も選ばれている。選ばれた選択肢を概観すると、そのどれもが自分と所属の違う学生(交流相手)の割合・人数を増やすことで、交流会への主な参加目的である「異文化交流」または「友人作り」あるいはその両方をさらに活発化させる狙いがあると見てとれる。

アンケート調査・質問 4

グループごとに分かれて行った会話の人数はどうでしたか。

表 12 アンケート調査・質問 4 回答

	別科生(9名)	日本人学生(11名)
多すぎた	0名(0.0%)	1名(9.0%)
ちょうど良かった	9名(100.0%)	10名(90.9%)
少なすぎた	0名(0.0%)	0名(0.0%)

グループごとに分かれて行った会話では、Zoomの機能を使用し、ブレイクアウトルームに分けて行った。1つのグループあたりの人数は3名から4名だった。回答では、別科生は「ちょうど良かった」が100.0%であり、日本人学生は90.9%だった。このことから1つのグループあたりの人数は3名から4名が適正であったと言える。一方で、日本人学生1名から「多すぎた」という回答が得られている。1つのグループあたりの人数は限られているものの、1グループあたりの人数をさらに少なくすることで、個人個人の発話量を増やすことができるため、このような回答が出たと推察する。

アンケート調査・質問 5

オンライン交流会の長さ(90分)はどうでしたか。

表 13 アンケート調査・質問 5 回答

	別科生(9名)	日本人学生(11名)
長い	0名(0.0%)	1名(9.1%)
ちょうど良い	8名(88.8%)	6名(54.5%)
短い	1名(11.1%)	4名(36.4%)

オンライン交流会の時間については、「ちょうど良い」が別科生は 88.8%、日本人学生は 54.5%とどちらも過半数を占めている。一方で、別科生は 11.1%、日本人学生においては 36.4%が「短い」を選択している。大学の授業の構成上、90 分を超える交流会を行うと 2 つの授業時間に跨ることになり、参加者の募集が見込めなくなることや途中退室をしなければならないなど、オンライン交流会を運営する上で、問題が生じやすくなる。そのため、「短い」という意見に対しては、1 度の交流会の時間を長くすることよりも、交流会を複数回開催することで、改善を図りたい。

5-3 ソーシャル・ネットワーク形成

本節では、実際にオンライン交流会が別科生と日本人学生のソーシャル・ネットワークの形成に繋がっているか、親交が続いているかについて考察したい。

アンケート調査・質問 6

このオンライン交流会で出会った別科生(または日本人学生)と交流会後にも親交がありますか。

表 14 アンケート調査・質問 7 回答

	別科生(9名)	日本人学生(11名)
ある	5名(55.5%)	6名(54.5%)
ない	4名(44.4%)	5名(45.5%)

今回、オンライン交流会を開催した目的に、別科生が日本人学生と交流することで、新たにソーシャル・ネットワークを形成するということがある。結果として、別科生 55.5%、日本人学生 54.5%が、交流会時にソーシャル・ネットワークの形成に成功し、交流会後にも交友関係を継続することができている。しかし、別科生 44.4%、日本人学生 45.5%が交流会後には親交がないと答えており、交流会時にはソーシャル・ネットワークの形成ができなかったと考えられる。ソーシャル・ネットワークを形成するためには、より継続した時間の共有が必要であり、繰り返し参加でき、より長い時間の共有ができる場を提供することが求められる。

アンケート調査・質問 7

今学期、このオンライン交流会以外に別科生(または日本人学生)と交流できる機会がありましたか。

表 15 アンケート調査・質問 8 回答

	別科生(9名)	日本人学生(11名)
あった	6名(66.6%)	5名(45.5%)
なかった	3名(33.3%)	6名(54.5%)

KUIS では 2020 年 4 月から始まった学期では、全ての授業がオンラインで行われていたものの、別科生 66.6%、日本人学生 45.5%がお互いに交流できる機会があったと回答している。一方で、別科生 33.3%、日本人学生 54.5%が交流する機会がなかったと回答しており、交流する機会がオンライン交流会以外では得られなかった学生もいた。ここで注目したいことは、オンライン交流会に積極的に参加した学生であっても、オンライン交流会以外の交流の場に参加できなかったことにある。オンライン形態の授業が始まってから、別科生と日本人学生が交流する機会が減少していると考えられる。

大学に行くことができないために気軽に交流できる場がなく、授業がオンラインになってしまうと、対面授業時よりもさらに能動的にお互いに交流の機会を設けなくては、機会が得られないのだろう。

以下の質問では、質問 7 で交流する機会が「あった」と答えた学生に、どのような場で交流したか記述してもらっている。

アンケート調査・質問 8

質問 7 で「あった」と答えた方は、どのような場で交流しましたか。(記述式回答)

表 16 アンケート調査・質問 9 回答

	交流した場(記述式回答・原文まま)
別科生 D	<u>カエデメイト交流会</u>
別科生 E	<u>カエデメイトをやっていた。そして、日本人の友達もいるので、時々一緒にご飯を食べたことがある。</u>
別科生 F	<u>MULC⁽²⁾ and LINE</u>
別科生 G	<u>カエデメトル</u>
別科生 H	<u>バイト先。</u>
日本人学生 I	<u>去年交流のあった学生と話すことがあった</u>
日本人学生 J	<u>PA⁽³⁾</u>
日本人学生 K	<u>留学生への授業のビジター参加。</u>
日本人学生 L	<u>ゼミでの留学生との交流会</u>
日本人学生 M	<u>留学生のインターアクションの授業にビジターとして参加した。</u>
日本人学生 N	<u>日本語クラスビジター</u>

質問 8 の回答を見るとカエデメイト (KUIS におけるチューター制度) や授業へのビジターとしての参加が散見される。これらの回答を集計するにあたり、LINE や単に友達と述べられているものや、去年交流があった学生との交流などは個人的な交流として数える。なお、

1名の学生が複数の要素を回答をしている場合には、それぞれの回答を1名分として扱い、それぞれの要素には下線を引いている。

表 17 交流があった場の集計

	別科生(5名)	日本人学生(6名)
カエデメイト	3名(60.0%)	0名(0.0%)
MULC	1名(20.0%)	0名(0.0%)
授業・ゼミへの参加	0名(0.0%)	5名(83.3%)
アルバイト	1名(20.0%)	0名(0.0%)
個人的な交流	2名(40.0%)	1名(16.6%)

別科生は「カエデメイト」での交流を主に挙げており、日本人学生の83.3%が「授業・ゼミへの参加」と述べている。このことから別科生の記述からは見られないが、日本語の授業の中で、日本人学生と交流ができていない学生が少なくないことがわかる。一方で、オンライン交流会に参加していることから、授業内での交流がソーシャル・ネットワークの形成に繋がらずコミュニティへの所属はできていないからこそ、オンライン交流会に参加しているとも言えるだろう。山川(2012)では、「大学内でのソーシャル・ネットワークの形成が難しい場合には、大学の外でコミュニティに参加、あるいは形成しなければならない」と述べられているが、Covid-19の影響により、アルバイトなど大学外での交流機会も失われているため、それも難しく、交流機会は大学内の授業などを通じたものが主となっている。授業内での交流は、発言の内容や機会の制限があると考え、オンライン交流会のようなソーシャル・ネットワークの形成を目的とした自由に会話ができる場の提供が強く求められるだろう。

5-4 オンライン交流会の満足度

アンケート調査・質問9

このオンライン交流会について満足度はどうですか。

表 18 アンケート調査・質問10回答

	別科生(9名)	日本人学生(11名)
とても満足した	3名(33.3%)	5名(45.5%)
やや満足した	5名(55.5%)	5名(45.5%)
ふつう	1名(11.1%)	1名(9.0%)
やや満足できなかった	0名(0.0%)	0名(0.0%)
全く満足できなかった	0名(0.0%)	0名(0.0%)

別科生と日本人学生が互いに交流できる機会が少ない中で、オンライン交流会は別科生と日本人学生が交流し、ソーシャル・ネットワークを形成することができる貴重な機会となる。また、日本人との交流を楽しみに来日している別科生や、別科生との交流を期待し

て入学した日本人学生にとっては、オンライン交流会の満足度は学生生活の満足度に繋がるだろう。

質問 9 から「とても満足した」「やや満足した」と回答した別科生は 88.8%、日本人学生は 91.0%と多くの学生の回答はオンライン交流会に好意的であった。しかし、別科生の 11.1%、日本人学生 9.0%は「ふつう」と回答しており、互いに交流することができる機会を十分に活かせなかったのだと推察する。オンライン交流会の開催目的は、コミュニティ形成の一助となり、自由に会話をする場の提供であるが、その趣旨を明確に学生に伝え、サポートしていくことで、より満足度の高いオンライン交流会となるだろう。

6. まとめ

Covid-19 の影響により、授業に問題が生じるだけでなく、別科生がソーシャル・ネットワークを形成していく過程にも変化が生じている。大学に行くことができなかったことで、様々な交流の機会を得ることができなかった。また、別科生と日本人学生の交流を目的としたオンライン交流会を開催したが、約半数の別科生、日本人学生が交流会後にも続く交友関係を構築できていなかった。これは交流会の開催理由を単に「交流するため」だけでなく、交流会後にも続けることのできる交友関係の構築ということを示すことで、ソーシャル・ネットワークの形成しやすくなる環境を提供することで、増加すると考える。

引き続き、Covid-19 が収束せず、オンライン授業が継続する場合には、来日してからも別科生は日本人学生と接触する機会を得ることができない。このままオンライン形態が続くことで、別科生は自力でソーシャル・ネットワークを形成することがさらに難しくなり、このようなオンライン交流会の需要は増すだろう。しかし、このような一定の期間を定めて開催する交流会は、今まで交流がなかった別科生と日本人学生のマッチングには効果が見込めるが、継続したコミュニティの提供をすることができない。継続したコミュニティの提供のためにはオンライン上に常設していつでも出入りできるような場を作成したり、複数回のオンライン交流会を実施したりする必要がある。また、日本語のオンライン授業についても、積極的に日本人学生をビジターとして招待することで、授業そのものをコミュニティとすることができ、別科生が日本人学生とソーシャル・ネットワークを形成することへの支援に繋げることができる。

本稿では、アンケート調査で得ることのできた回答に対し、フォローアップ・クエスチョンを行っていないが、アンケート調査についてフォローアップ・クエスチョンを行うことで、オンライン交流会参加者の内省がさらに顕在化され、ソーシャル・ネットワークの形成やコミュニティへの所属についてのそれぞれの学生の考え方が見えてくるだろう。

本稿は、1 度のオンライン交流会の考察に過ぎないが、今後さらに盛んになっていくオンラインでの交流において、別科生と日本人学生がコミュニティへ積極的に参加し、互いにソーシャル・ネットワークを形成し、オンラインでコミュニティに参加し、所属することができるコミュニティを見つけるための一助となることを願う。

注

(1) 本稿では百分率表示時に小数点第 2 位以下を切り捨てて表示する。

- (2) “Multilingual Communication Center” の頭文字をとった略称。神田外語大学内の施設であり「擬似留学空間」として留学生、日本人学生、ネイティブの講師が気軽に交流できる場。
- (3) “Performance Activity” の略。留学生別科の授業に日本人学生を招いて行う授業の1つ。

参考文献

- (1) 田中共子(2000)『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版
- (2) 山川史(2012)「『自分の居場所探し』としてのソーシャル・ネットワーク形成」『ICU 日本語教育研究』8、49-63